
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 260

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 5181.【ヴェネチア旅行記】ヴェネチアの商人Andrea Odoni:昨夜のコンサートを振り返って
- 5182.【ヴェネチア旅行記】不思議な時間感覚:旅行後の断食について
- 5183.【ヴェネチア旅行記】ヴェネチアで死を覚悟した経験～自然の脅威
- 5184.【ヴェネチア旅行記】50年振りの記録的な大高波に襲われて
- 5185.【ヴェネチア旅行記】ヴェネチア滞在5日目の計画
- 5186.【ヴェネチア旅行記】浸水に見舞われる毎日:明日の行動計画
- 5187.【ヴェネチア旅行記】「水の都」ヴェネチアで「1200年の歴史で6度目」の歴史的な浸水被害に直面して
- 5188.【ヴェネチア旅行記】戦慄を伴う不気味な夢
- 5189.【ヴェネチア旅行記】大惨事後の優しい夕日を眺めながら
- 5190.【ヴェネチア旅行記】ヴェネチア出発の朝に:今日という新たな輝き
- 5191.【ヴェネチア旅行記】オランダへの帰還:今夜からの断食について
- 5192. フローニンゲンに戻ってきて
- 5193. 同別古新・独独独
- 5194. 守護神:日常と非日常の間の通路
- 5195. フローニンゲンに戻って最初の朝の感覚と夢
- 5196. 言葉と音の庭園:永遠を希求する何か
- 5197. 断食と続編のオンラインゼミナールに向けて
- 5198. ヴェネチア旅行から帰ってきての初日及び断食1日目を終えるに際して
- 5199. 断食2日目の開始
- 5200. 断食2日目の夢

今、本日一杯目のカカオドリンクを飲んでいる。自室に備え付けられているカップの大きさは品があり、今日はこのカップで何杯かのカカオドリンクを味わうことになるだろう。自室に広がるカカオの香りは香ばしく、それは活動に向けた精神を高めてくれながらにして大いにくつろがせてくれる。

ヴェネチアの静かな時と空間の中で、自然と筆を走らせている自分がいる。言葉が生まれようとするその流れは、怒涛の流れというよりも、絶え間なく湧き上がる山水のようである。

現在宿泊している場所については、ここ数日間の日記の中でも何度も言及しているように思う。現在宿泊しているのは、Palazzo Odoniという宮殿のようなホテルであり、この建築物が建てられのは1400年代である。

最初にこの建物を所有したオーナーは、ヴェネチアの歴史上においても重要人物であったAndrea Odoni(1488-1545)であることが一昨日わかった。今宿泊している部屋から外に出て、廊下を歩いている最中に、壁にかかっているいくつかの絵画を眺めていたところ、彼の肖像画があったのである。その肖像画は“Portrait of Andrea Odoni”という名前でも知られており、原画は英国のロイヤルコレクションが所有しており、今年の初旬にはロンドンのナショナル・ギャラリーで展示されていたそうだ。Odoniは、ヴェネチアで成功した商人として有名であり、肖像画を見ると、その凛とした佇まいと表情から、彼の性格を窺い知ることができる。

昨夜のコンサートについて、今改めて振り返っている。昨夜の室内楽のコンサートにおいては、ヴィヴァルディ、メンデルスゾーン、そしてタルティーニ(ヴェネチア生まれのバロック時代の作曲家)の曲が演奏された。演奏目録は下記の通りである。

ANTONIO VIVALDI

Concerto violino, archi e cembalo RV. 211

violino, Luca Ranzato

- allegro non molto

- larghetto

– allegro

Concerto per ottavino, archi e cembalo RV. 443

ottavino, Andrea Dainese

– allegro non molto

– largo

– allegro

Concerto per 2 violini, archi e cembalo RV. 514

violino, Giuliano Fontanella, Nicola Granillo

– allegro non molto

– adagio

– allegro non molto

Concerto per flauto, archi e cembalo op. 10 n. 3

“il Cardellino”

flauto, Andrea Dainese

– allegro

– cantabile

– allegro

FELIX MENDELSSOHN

Sinfonia per archi n. 10

GIUSEPPE TARTINI

“Il Trillo del Diavolo” per violini e archi

violino, Nicola Granillo

コンサートを聞きながら、改めて創造主になることの大切さを思った。私たち一人一人は、自分の人生の創造主であり、かつ自分の内側から何かを創造していくことを宿命づけられている。それは私にとっては、言葉と音の創造として現れてくる。

一昨日や昨日にコンサートで演奏される曲はどれもそれほど長くないのだが、改めて私は、音を通じた俳句のような曲を作っていきたいと思った。冗長さを避け、それでいて自分の感覚を全て表現できるような曲を作っていきたいという思い。

私が日本人だからなのか、そして今、日本的な感性や霊性が開かれようとしているからなのか、俳句的な曲を作っていきたいという思いが高まっていく。ヴェネチアの街に降り注ぐ小雨の音に耳を傾けながら、今日は自室でゆっくりと曲でも作ろう。ヴェネチア:2019/11/12(火)08:28

5182.【ヴェネチア旅行記】不思議な時間感覚:旅行後の断食について

午後に仮眠を取った時、とても不思議な体験をした。それはヴェネチア旅行を通じて自分の時間感覚が大きく変容していることを示すようなものだった。あるいは、時間感覚のみならず、その他の諸々の感覚が変容していることを示すものだったように思う。

20分ほど仮眠を取ろうとしてタイマーを設定すると、その20分がごくわずかの時間に感じられた。体感覚としては、時間が10分の1ほどに縮小されたような感覚であった。そこから再度実験的に15分ほど目を閉じてみようと思って、再びタイマーを設定してみると、タイマーが鳴ったのは確かに15分後だったのだが、やはりほんのわずかな時間に感じられた。この感覚をうまく表現することは難しい。半年ほど前に数日間の断食を行った際に、知覚が鋭敏なものとなり、時間感覚が変容する体験をした。強いて挙げるならば、その時の体験と似ているだろうか。

ヴェネチアに滞在している最中にふと、旅から戻ったら断食をしようかと思った。旅行から戻った次の日は金曜日であり、自宅の冷蔵庫にはちょうど食べ物などが一切ない状態なので、この機会に数日間の断食を試みようかと思う。少し前までの計画では、年末に断食をする予定だったが、自分の心身がどうも断食を欲しているように思われる。それは身体的にデトックスをすることのみならず、心の面におけるデトックスにもつながるだろう。

昨日、ペギー・グッゲンハイム・コレクションでミロの作品を見た時、バルセロナで訪れたミロ美術館のことを思い出した。この美術館は、ミロの作品が非常に充実しており、そこでミロから様々なものを受け取った。

展示作品を眺めていると、ミロもまた空腹を通じて意識を変容させて絵を描いていたことを思い出す。ミロは断食をしようと思って行ったわけではなく、若かりしミロはまだ画家として成功しておらず、食うものに困ってのことだった。だがそれが幸いしてか、ミロは断食状態の中で、異常な集中力と異常な知覚力を獲得し、その力を元に独創的な絵を描いていった経験を持っている。そのようなエピソードをふと思い出した。このエピソードに幾分触発される形で、フローニンゲンに戻ったら数日間の断食を行おう。それは年末の断食の代わりとして行う。

今日は本当に外出しなくて正解だった。今の宿泊先には受付がなく、受付担当の世話人にメールをし、新しいタオルとトイレトペーパーだけをもらい、今日は自室にこもってゆっくりしていた。部屋に備え付けられた画集を眺めてみると、ターナー、モネ、ルノワールなどがヴェネチアをテーマにして描いている絵がいくつかあることに気づいた。モネに関しては、昨年にもロンドンのナショナルギャラリーでそれらの絵を見ていたのだが、そのモチーフがヴェネチアであることに気づいていなかった。

画集をゆっくり眺めたり、過去の日記や曲を編集することを行なって、気づけば時刻は午後の5時を迎えた。今日は午前中に、一昨日よりも激しく運河が氾濫していた。ホテルの前は完全に浸水しており、人々は長靴を履いて運河沿いの通りをジャブジャブと音を立てながら歩いていた。

今夜はコンサートがあるため、浸水の状況が心配されたが、浸水がひどいのは満潮の時間帯だけであり、その時間帯が過ぎると徐々に水が引いていき、この時間帯はもう通りは普通に歩けるようになっている。今夜のコンサートに長靴を履いていかなければならないと思っていたが、今の状況であればそれは必要なく、とても有り難く思う。

これから少しばかり作曲実践をして、18時半あたりに軽く夕食を摂り、19時半過ぎにホテルを出発して、コンサート会場に向かいたい。今日は人生初めてのオペラ鑑賞となる。ヴェネチア:2019/11/12(火) 16:58

なんとか生きて帰ってくる事ができた。本当に、意思決定を誤っていたら、死に至っていたかもしれない。そのような体験を先ほどした。もう結論から述べると、数日前の浸水、昨日の朝や今朝の浸水とは比べ物にならないほど運河が大氾濫を起こし、しかも大雨と強風によって嵐のような状態に見舞われた。

今から数時間前、そう3時間半前の19時半に時計の針を戻すと、ちょうどその時間に私はホテルを出発し、ヴェネチアの一つの象徴でもあるリアルト橋を渡り、その近くにあるコンサート会場にオペラを聴きに行った。その時はまだ浸水しておらず、幸運だと私は思ったが、幾分強い雨風の状態が気になった。

とはいえ無事に会場に到着すると、一昨日よりも早めに到着することができたからか、人はそれほどおらず、バロック時代の衣装を着た係員にチケットを見せて、速やかに会場に入った。早く出発したことが功を奏してか、私は一等席の最前列に腰掛けることができた。そこからは客が徐々に入ってきて、定刻通りに20時半にコンサートが開始された。一昨日と同じオーケストラの演奏を今日も聴くことになったが、今回は前回と異なり、室内楽ではなく、オペラであった。

私にとってオペラ鑑賞は今回が初めてであったから、開演前からとても楽しみな気持ちになっていた。実際にコンサートが始まると、やはりバロック時代の衣装のおかげか、その時代のオペラはなお一層のこと美しく聴こえた。バス、テノール、ソプラノの三人の歌手の歌声は本当に見事であり、仕草の中には時に笑いを誘うものもあった。今日もまた夢見心地でコンサートを楽しんでいると、前半部分があっという間に終わった。

前半の最後の曲であるモーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』が終わりを告げ、休憩時間に入った時、異変が起こった。

宝石に彩られたバロック時代の衣装を着た係員の大柄な男性が観客席に近づいてきて、「大変な浸水になっています。もう今はこんなにも(手で水の深さを示しながら)水が浸水してしまっていて、今から30分後にはもう今の比ではないでしょう」と述べた。一等席の最前列にもその係員がやってき

て、私の方見て、「お客さんの格好だと、もう完全に足は浸水ですね」と述べた。最初それを聞いた時、長靴を持参していたからそれほど問題ないと思っていたが、妙な胸騒ぎがした。

係員の男性は、「このような天候状態ですが、後半の部も引き続き行います。ただし、これからますます浸水が激しくなってきますので、ご自身の判断で残るかどうかを決めてください」と述べた。私は、同じく最前列の隣に座っていた三人のアメリカ人家族と目を合わせて、「これは困った」という表情をお互いに浮かべた。

私:「いや〜、ひどいことになりましたね」

アメリカ人家族の奥さん:「そうですね、まだ後半があるというのに」

アメリカ人家族の旦那さん:「あなたはどうされますか？」

私:「私は前半で失礼します。これ以上浸水が激しくなったら帰れなくなってしまうかもしれないので。とはいえ、ちょっと会場の外を見てきますよ。もし本当に浸水が激しかったら帰った方が良さそうですね」

私はそのように述べ、二階のコンサート会場から一階に降り、扉の方に向かっていった。するとそこには、信じられない光景が広がっていた。もう完全に運河の水が氾濫しており、膝の高さにまで水が迫ろうとしていたのである。

「これはまずいかもしれない…。今ならまだ長靴の中に水が入らない高さだろう」と私は思った。すぐに二階に荷物を取りに行き、アメリカ人家族に状況を伝え、私は一足先に帰ることにした。彼らは後半の部も最後まで聴くとのことだったので、「後半の部もお楽しみください。帰りはお気をつけて」と述べて会場を後にした。この時まだ救われたのは、コンサート会場に来る際に降っていた雨が止んでいたことである。

雨が止んでいたことが唯一の救いであり、そこからおよそ2kmほど、完全に浸水し切ったヴェネチアの入り組んだ道を歩み進むことになった。その時はまだ膝まで水が上がっていなかったが、およそ40cmぐらいまで浸水していた。そうした水の中を歩く様子は、海上自衛隊の訓練かと思わせるもの

だった。最初私は、このような状態に見舞われることは滅多にないであろうから、そうした状況でさえも少しばかり楽しんでた。だが、そこからしばらくすると、事態は徐々に笑えないものになっていったのである。途中からはもう完全に膝まで水が浸水し、店やレストランの従業員たちが、ホースのようなチューブを使ったり、バケツを使ったりして、必死に店の中から水を外に出していた。

私が宿泊しているホテルの前は水が溜まりやすくなっており、そこに到着した際には、もう膝が完全に隠れてしまうぐらいに水が氾濫していた。一つ私が心配だったのは、浸水仕切った重い扉がちゃんと開くかどうかである。

恐る恐る鍵を差し込み、扉を押してみたところ、なんとか無事に扉が開いた。だが、扉を開けたために、一気に水が扉の中に流れ込んできて、水の強力な力に抵抗する形で扉を閉めることは相当に力が必要だった。

なんとか無事にホテルに到着できた私は、深い安堵感に包まれた。自室に戻り、ずぶ濡れになってしまったズボンと靴を乾かしていると、窓の外から、朝方に聴こえてきたクリスタルボウルのような音が聞こえてきたのである。朝方はそれを幻想的で美しいと思ったが、私はその音の意味に気づいた。それは浸水や大雨を伝える警報だったのだ。

その警報音がなって数分すると、天候はとんでもない方向に悪化した。台風並みの雨と風が吹き始めたのである。もし仮にコンサート会場の係員が述べたように、後半の部までを全て聴き、後30ほど会場を出発する時間が遅れていたら、私は台風のような雨風が吹く中を、腰近くにまで水が上がった道を帰ってこなければならなかつたらう。それを考えると、ゾツとする。

自然の力、特に水の力というのは本当にバカにできず、下手をすると、水というのは火よりも危険な力を持っているのではないかと思うのである。仮に欲を出して、後半の演奏を聴いていたら、私は無事にこの日記を書くことができたのだろうか。あの時、何かおかしいと危険を察知し、前半の演奏が終わった段階で帰ることを決意した自分の直感力に感謝したいと思う。

自室に戻ってからは、雨にずぶ濡れになった靴の乾かし方をインターネットで調べ、それを実行に移した。その最中も雨風はどんどんと強くなり、部屋の窓が風で激しく打ち付けられる音が聞こえてきた。部屋の窓は二重窓の作りになっていて、外側の窓を閉めなければならなかつた。1400年代に

作られた窓は現代の窓とは作りが異なっており、最初どのように閉めればいいのかわからなかった。部屋に吹きつけてくる大雨と風をなんとか避けながら、無事に扉を閉めるまでに少々時間を要した。なんとか窓の扉を閉め、冷え切った体を温めるためにシャワーを浴びることにして今に至る。

まさか旅先のヴェネチアでこのような体験をするとは思ってもみなかった。判断が少しでも狂っていたら、死の危険性を本当に感じていただろう。自然の脅威というのはこのようなことを言うに違いない。今回の一件を通じて、自分の本能的な感覚が目覚めたように思う。明後日は無事にオランダに帰れるだろうか？ヴェネチア：2019/11/12(火)23:30

【追記】

私が体験したこの出来事は、ヴェネチアの1200年の歴史上、6度目の津波災害だったということが本日に判明した。ヴェネチア：2019/11/13(水)08:50

5184.【ヴェネチア旅行記】50年振りの記録的な大高波に襲われて

昨夜は冗談ではなく、自分の生命の危機を感じた。就寝する時にも外は台風のような豪雨と風が吹いており、昨夜あと少し帰宅が遅れていたらと思うと、ゾッとするほどであった。

就寝に向かっている私は、コンサート会場に残ることを決めた客や演奏者たちの安否を心配した。そして、路地裏などで見かけていたホームレスの人たちの安否を心配し、彼らの無事を祈っていた。それほどまでに昨夜の出来事は命の危険性を感じさせるものだった。

今朝方、5時頃に、再びあのクリスタルボウルのような音が聞こえてきた。昨夜私は、それが警報であることを推測し、今朝方その音が聞こえた時には「またか」と思った。昨日まではその音が幻想的で美しさがあると思っていたが、そこに「警報」という意味が加わると、なんだかとても不気味な響きのように聞こえてきた。

起床してからもしばらくはカーテンと外窓を閉めたままにしていたので、外の様子が一向にわからない状況であった。辺りが明るくなり始めたのを見計らい、午前7時を迎えた段階で内窓だけではなく、外窓を開けてみた。するとそこには、昨夜の洪水が嘘のように引いており、私は心底安堵した。

もちろん、この時期のヴェネチアで浸水するのは日常茶飯事のようにあり、今後も油断はすることはできない。だが幸いにも、昨日までの天気予報から変化があり、ヴェネチアの実質上の滞在最終日である今日と、ヴェネチアを出発する明日は晴れのようなのである。

昨夜の被害状況を確認するためにインターネットで調べてみると、なんと昨日の出来事は、過去50年間で最大の高波とのことであり、不幸にも死者が出るほどのものであった。波の高さは最高で187cmほどまで到達していたそうである。その高波がヴェネチアの街に押し寄せ、街は一気に水の下に沈んでしまったかのようになった。

今から遡ることおよそ50年前の1966年に、194cmほどの高波がヴェネチアを襲い、大きな被害に逢うという出来事があった。今回、まさか自分がそれに次ぐ規模の災害に見舞われるとは全く思ってもみなかった。なんとかこのように無事に生きていることを本当に有り難く思う。

ヴェネチアは、年中浸水するとのことだが、特に10月から1月にかけては水が高くなる。それを事前に知っておけば、また別の時期にヴェネチアを訪れていたかもしれない。あるいは逆に、今回の一件をもってして、自然の脅威を身をもって学び、今後活かすために、このたびヴェネチアに導かれたのかもしれない。いずれにせよ、自然の力は人間の想像を遥かに超えているということを身をもって学ばされた次第である。ヴェネチア:2019/11/13(水)07:23

5185.【ヴェネチア旅行記】ヴェネチア滞在5日目の計画

やはりあのクリスタルボウルのような音は警報を示すものであった。現在時刻は午前7時半を迎えようとしており、警報音がなつてしばらく時間差があった後、ホテルの前の通りがまたしても浸水を始めていた。ただし昨夜ほどの水の深さではないことが幸いだが、それにしてもこの頻度には驚かされる。

ここ数日間ヴェネチアに滞在してみた経験上、朝のこの時間帯が一番浸水しやすいようであり、明日の出発の時間を真剣に考えようかと思う。当初の計画では、ホテルを8時半辺りに出発しようと考えていたが、仮にこの時間帯が浸水の被害を受けやすいのであれば、もう少し早めに出発する必要がある。

30分前の午前7時の段階では、まだ浸水が始まっておらず、ホテルの目の前の通りは普通に歩けるような状態であった。そうしたことから、7時前を目安にホテルを出発してしまい、空港のラウンジでゆっくりする方が賢明かもしれないと思われた。そうしたこともあり、今から1時間ほどでどれだけ水が浸水するのか、あるいは水が引いていくのかを確認し、その結果をもって明日の出発時間を決めたい。とにかく無事にオランダに戻ることを最優先である。

当初の計画では、ヴェネチア滞在の最終日である今日は、カペーザロという美術館に行くことを考えていた。だが今はまだ靴が乾き切っておらず、少なくとも午前中はホテルの自室で過ごす必要がある。今日と明日は天気は良いとのことであるから、あとは浸水の問題だけだ。靴が乾き、ホテルの外に出られるようであれば、午後からはカペーザロに行く。この美術館では、19世紀から20世紀前半にかけてのイタリア人作家の作品を多くみることができる。また、先日に言及したように、クリムの『ユディットII(サロメ)』を鑑賞することができる点も見逃せない。

昨夜の災害に遭ってから、生存的な危機に晒されている時に芸術やら音楽やらなどと言っていられないことを身に染みて実感した。芸術や音楽を楽しむためには、少なくとも身の安全性が確保されているという当たり前の前提条件を教えられたように思う。身の安全性が確保され、そこに精神的なゆとりが加わって初めて、芸術や音楽を楽しめるようになるのだと思う。

生きていくという極めてシンプルな事柄の大切さと、それが持つ意味を思うとき、芸術や音楽が持つ意義については再考を迫られる。今回の直接体験を元に、そのテーマについては真剣に考えていかなければならないように思う。ヴェネチア:2019/11/13(水)07:41

5186.【ヴェネチア旅行記】浸水に見舞われる毎日:明日の行動計画

時刻は午前8時を迎えた。やはりあの警報音の通り、この時間帯はもう完全に道が浸水している。ホテルの前の通りだけではなく、反対側の通りもまた水の下に沈んでいる。この状況を見て私は、明日は予定よりも早くホテルを出発することにした。

警報が鳴ってすぐに浸水が始まるのではなく、少し時間差があるため、起床してからどのタイミングで警報が鳴るかを注意しておこう。もちろん、そうした警報が鳴らないことに越したことはない。かろうじて警報の音が聞こえなかったのは、ヴェネチアに到着した翌日だろうか。いやあの日はその音

に気付いていなかったかもしれない。滞在中のすべての朝は、必ずホテルの前の通りが浸水していたように思う。

今日は晴れとのことであり、雨による増水がなさそうなのが唯一の救いである。明日は浸水がないことを祈り、仮にあったとしても少しばかりの浸水であればと思う。

できる限り浸水が始まる前にホテルを出発したいと思い、先ほどバスの時間を調べておいた。今私が宿泊しているのは、ヴェネチアの中心部からほど近く、Piazzale Romaというバス停があり、そこからマルコ・ポーロ空港に向けてノンストップのシャトルバスが出ている。わずか20分で空港まで着けてしまう便利なバスだ。

明日のフライトは12:20にマルコ・ポーロ空港を出発するものである。ボーディングの開始は30分前の11:50となるだろう。マルコ・ポーロ空港には、Priority Passで利用できるラウンジが二つあり、一つはビジネスラウンジであり、もう一つは食事などがより充実したラウンジだ。後者は“Marco Polo Club”という名前であり、明日はこのラウンジでゆっくりしたいと思う。

大抵のラウンジは、出発時間の3時間前からしか利用できず、このラウンジについて調べてみたが、そうした表記はなされていなかった。だがおそらく3時間前からしか使えない可能性もあり、空港に到着するのはあまり早くない方が望ましかった。とはいえ、明日の朝ホテルに長く滞在し、浸水に見舞われるのを避けたいため、明日は早く空港に行き、一応ラウンジに真っ先に向かってみるが、もし3時間前からしか入れないのであれば、空港内のどこか適当な場所で時間を過ごしたいと思う。

今、またしてもあの警報音がなった。それはこれから浸水がさらに進むという知らせだろうか。それとも、浸水がここでピークを迎え、今から水が引いていく知らせなのだろうか。そのあたりのメッセージの意味についてはまだ完全に把握していない。

起床してすぐに靴の状態を見てみたところ、幸いにも随分と乾燥しているが、まだ少し中がひんやりとしているようだった。午前中一杯はホテルで過ごすことが確定し、昼過ぎあたりまでには靴が完全に乾いていて欲しいと思う。その頃になれば浸水の水が引いているであろうから、予定通り、カペーザロ美術館に行く。美術館で鑑賞を終えたら速やかにホテルに戻ってきて、帰り道にオーガ

ニックスストアに立ち寄ろうと思う。ホテルからすぐ近くのこの店も、昨夜の浸水によって影響を受けていると思われるが、その被害が少ないことを祈る。ヴェネチア:2019/11/13(水)08:37

5187.【ヴェネチア旅行記】「水の都」ヴェネチアで「1200年の歴史で6度目」の歴史的な浸水被害に 直面して

今朝方、英語空間内で昨夜の出来事について調べていたのだが、今改めて日本語でも昨日の出来事について調べてみたところ、やはり日本のニュースでも昨日の出来事が取り上げられていた。「世界遺産に登録されているヴェネチアの街が水没の危機にある」というタイトルのものもあった。

昨日の早朝に、とても幻想的だと思っていた音はやはり警報であり、それは高潮警報だったようだ。高潮警報を聞きながら恍惚的な気持ちになっていた自分に対して可笑しくて笑えてしまう。だがあの響きはどこか恍惚感を引き起こすような独特な響きであり、危険を知らせるような音には聞こえてこなかった。先ほどもそれが鳴ったということは、やはり今日も高潮の危険性があるようなので要注意だ。

高潮警報の響きそのものだけが恍惚的な感情を引き起こしたのではなく、高潮の先に待っているかもしれない死という現象が、どこか不気味な恍惚感を引き起こしていたのではないかという考えが芽生えた。死が持つ恍惚的なものの根元を探り、それを音として表現していく試みに着手してみよう。

死というのは本当に謎めく現象であり、そうした恍惚感を私に感じさせるだけではなく、同時に昨夜は、生命の危機が訪れるかもしれないことに伴う一種の胸騒ぎと、普段発揮しないような研ぎ澄まされた感覚があった。それは五感が研ぎ澄まされるというだけではなく、第六感、そしてさらにはその他にもまだ潜在的に人間が有しているであろう種々の隠された感覚までもが研ぎ澄まされたように感じたのだ。

ヴェネチアの街は携帯のGPSがうまく機能しないことがあり、現地人に聞くと、実際にそのようであった。ここまでの数日間、ヴェネチアの入り組んだ道には本当に苦労させられ、歩いている最中にはその街並みを楽しむというよりも、迷路の中で頭と感覚を存分に働かせているというような状態だった。それにもかかわらず、ここ数日間は毎日必ずどこかで道に迷うということが起こっていた。

一昨日、カナル・グランデに架かるアカデミア橋の向こう側にあるコンサート会場に行く際にも、その時間帯が夜であったから、昼間と景色が異なって見え、道に迷ってしまった。その際に現地人らしき二人の若いイタリア人カップルに声をかけ、コンサート会場までの道のりを教えてもらった。GPSがうまく機能しないということは彼らに教えてもらったのである。そのようなことが一昨日まであったのだが、昨夜は少し様子が違った。「ここで道を間違えたら命が危ない」という意識が私の中にあり、それが眠っていた種々の感覚を呼び覚ましたようだった。それはどこか断食をしている最中の感覚に似ていた。

人間は生命の危機が迫っている時、まさに「火事場の馬鹿力」という言葉に代表されるような、何か特殊な感覚を開き、特殊な力を発揮するのだと思う。そのようにして開かれた感覚のおかげか、昨夜は一切迷うことなく別のコンサート会場からホテルまで戻ってくる事ができた。

世界遺産に登録されているサン・マルコ寺院は、最も標高の低いところにあるサン・マルコ広場の前にそびえ立っており、「1200年の歴史で6度目」という深刻な被害を受けたそうだ。私たちが住むこの地球は、本当にどうしてしまったのだろうか。

近年、日本を含めて、世界のあちこちで記録的な自然災害が続いている。私たち人間がこれまでの歴史で続けてきた数々の愚行に対する裁きなのだろうか。現在頻繁に起こっている自然災害は、地球という惑星の怒りの現れかもしれない、あるいは嘆きの現れなのかもしれない。

今回の一件は、自己を遥かに超えた地球という生命体と、それすらも超えた大きな存在について深く考えさせられる体験となった。それらの存在と自分との関係性を見つめ直していかなければならない。ヴェネチア:2019/11/13(水)09:05

5188.【ヴェネチア旅行記】戦慄を伴う不気味な夢

2100年を迎える頃、今よりも気温が4度ほど上昇し、水没してしまう地域が出てくるかもしれないという記事を見かけた。現在私が住んでいるオランダは、もしかするとそうした地域の一つなのかもしれない。今後の人類史において、消滅してしまうかもしれない地域に自分が住んでいると思うと、どこか神妙な気持ちになる。そうした事態を防ぐ選択を私たちは賢明に選び取っていくことはできないだろうか。私たち人間が住む現代社会だけが病んでいるのではなく、そもそも私たちが住む地球が

病み始めている。それは今に始まったことではないかもしれないが、その病理の進行は年々加速しているように思えてくる。

今この瞬間には雨は降っていないが、先ほど鳴った本日2度目の高潮警報通りに、浸水の状態は悪い。通りは完全に水没し、その中を長靴を履いた人たちが懸命に歩いている。ホテルの目の前には、煉瓦造りの家々が並んでいる。そのうちの一軒の三階に住むお婆さんが、窓越しから外を心配そうに見つめている。昨日もそのお婆さんは同じようにして外を眺めていた。

昨夜の出来事が影響してか、今朝方は少し不吉な夢を見た。夢の中で私は、どういうわけかビル・ゲイツ氏と友人関係のようであり、彼とアメリカの西海岸の街のレストランで話をしていて、話が盛り上がり、ひょんなことから私はマイクロソフトで働くことになった。ゲイツ氏がその話を持ちかけてくれ、私はその話に乗ってみることにしたのである。

レストランでの会話を終えると、ゲイツ氏は所有しているプライベートジェットを私に見せてくれた。それは立派なジェット機であり、マイクロソフト社はそうしたプライベートジェットも製造しているとのことだった。ゲイツ氏は、エコを意識してプライベートジェットを製造していると述べていたが、エンジンから漏れてくる水を見ると、それはあまり地球環境に良くないのではないかと思われた。そもそも、エンジンから水が漏れて大丈夫なのかとも思った。

マイクロソフトで働くにあたって、私は引越しをしなければならなくなった。それは少々面倒だなと思った瞬間に、私は西海岸のハイウェイを走る一台の車の中にいた。私は助手席に座っていて、運転席を見ると、以前進学塾で働いていた時の社長がそこにいた。私は社長が運転する車に揺られながら、どこかに向かっていた。その最中、社長とはほとんど会話をしない状態が続いていたのだが、社長の運転が少々荒く感じられたので、その点についてさりげなく指摘してみた。だが、運転は一向に安全なものとならず、むしろハイウェイを走る速度は上がり、道路からはみ出してしまう瞬間が現れ始めた。そして、事態はさらに悪化し、車は反対車線に移ってしまったのである。

すると、車が一気に宙に浮き、ハイウェイの上空を車が走り始めた。その直後、車は空から地上に向かって急激に下降を始めた。その時私は死を覚悟した。だがその瞬間、私は車から外に投げ出

され、ハイウェイの近くにあった沼地に落ちた。なんとか一命を取り止めたものの、そこからどうやって沼地から脱出するかが問題であった。

沼地を横切るために、私は沼地を囲っている川を泳ぎ、向こう岸に行こうとした。なんとか向こう岸に辿り着いた時、5~6人のアメリカ人の若い女性たちがボートを担ぎながら歩いていた。私は彼女たちに助けを求め、彼女たちは親切にも私を助けてくれると言う。そしてなぜ私がこんな沼地にいるのかを説明したところ、衝撃的な事実を知らされた。

それは、運転席に座っていた社長はハイウェイを運転している最中に、射殺されたというものだった。どおりで社長が車中でやたらと口数が少なかったわけである。もうその時すでに社長は射殺されていたのだ。彼女たちに事の真相を教えてもらった私はどこか不気味なもの感じがし、それは戦慄を伴って背中を走り抜けていった。ヴェネチア:2019/11/13(水)09:28

【追記】

ヴェネチア旅行を終え、今私は、スキポール空港からフローニンゲンに向かう列車の中にいる。上記の夢日記を読んでみた時、沼地の対岸は彼岸のように思えた。そこにいたアメリカ人女性たちは、彼岸に住む天使を象徴するようなシンボルだったのかもしれない。

車窓から今このようにしてオランダの田園風景を眺めている自分が静かに存在している。夕暮れの風車の動きはゆったりとしている。フローニンゲンに戻る列車の中:2019/11/14(木)16:25

5189.【ヴェネチア旅行記】大惨事後の優しい夕日を眺めながら

時刻は午後3時半を迎えた。今、ヴェネチアの夕方空に、心を深く安らげるかのような夕日が姿を現した。この夕日の輝きにどれだけ心が癒されるだろうか。自然はとても残酷であると同時に、とても優しい。いや、自然というのは残酷さや優しさなどといったものを超越しているのだろう。昨夜、歴史的な津波災害にあったヴェネチアにとって、この夕日は市民にとっての癒しの光である。

運河を挟んで反対側の建物に住んでいるお婆さんは、私と同じ感性を持っているのだろうか。あるいは、何か魂の共通の感覚質を持っているのだろうか。私がたった今窓辺に近づいて、姿を現した夕日を眺めていたところ、そのお婆さんも窓越しから同じく夕日を眺めていたのである。

昨夜のあのおぞましい光景とは一転して、天国のような光景が今日の前に広がっている。

今日の午後、なんとか潮が引き、ずぶ濡れになった靴も奇跡的に乾いたため、カペーザロ美術館に向かって出発した。ここは、カナル・グランデに面する宮殿かつ美術館であり、建築物としても立派である。

宿泊先のホテルからこの美術館までは歩いて15分ほどの距離であり、とても近い。水が引いた通りを見ただけで安堵感があったが、浸水によって被害を受けた店の様子はどこも悲惨であった。美術館までの道のりは入り組んでおり、最後の方で少しばかり迷ってしまったが、美術館に無事に着いた。ところが、美術館の入り口付近に赤いテープが貼られており、中にはガードマンたちが数人いて、その他には復旧作業をしている人たちが何人かいた。

ガードマンに声をかけてみると、残念ながら今日は急遽閉館とのことであった。昨日の歴史的な災害を考えると、それは当然のことだと言えるかもしれない。結局、楽しみにしていた美術館で作品鑑賞ができなかった私は、来た道を引き返し、ホテルの近くのオーガニックストアで夕食用の豆腐を購入しようと思った。店に到着してみると、先日親切に対応してくれた店員がフロアにかがみ込んで、必死に水を外に出したり、濡れてしまった商品の対応をしているところだった。私は店の外からその店員に声をかけ、無事かどうかを確認したところ、なんとか無事だとのことだった。結局その店も今日は休みとのことであり、明日からはまた通常通りに店を開くとのことであった。

明日はもうヴェネチアを出発する日となり、明日は高潮予報をこまめにチェックして、適切なタイミングでホテルを出発しようと思う。あまり早すぎても空港のラウンジを使えないかもしれず、かといってタイミングを間違えると、またしても浸水した道を通ってバス停まで行かなければいけないかもしれない。そうしたことを考えて、天気予報のみならず、潮の高さがリアルタイムで表示されるこのような高潮予報 (<https://www.tide-forecast.com/locations/Venezia-Italy/tides/latest>)もこまめに確認したい。

今回私は、浸水した街で生活をするという初めての体験をした。それはどこかアポカリプス的(黙示録的)な感じを引き起こす。水没した街で生活するというのは、近未来の人間たちの姿のように思えた。ヴェネチア:2019/11/13(水)15:40

5190.【ヴェネチア旅行記】ヴェネチア出発の朝に: 今日という新たな輝き

今私は、コーヒーや香ばしいパンの香りが立ち込めるマルコ・ポーロ空港のMarco Polo Clubというラウンジにいる。今朝方はゆっくりと起床したため、ホテルで日記を執筆する時間がなかった。そのため、この日記が今日初めてのものとなる。

今日はいよいよヴェネチアを出発し、オランダに帰る日だ。起床してみると、もう辺りは薄明るくなっていて、数日前の歴史的な水害が嘘のように平穏な世界が広がっていた。ヴェネチアを出発するこの日は本当に天気が良く、起床してしばらくすると、黄金色に輝く朝日が顔を覗かせ始めた。私は自室の窓を開け、新鮮な空気を部屋に取り入れながら、その輝く朝日を眺めていた。

空は雲ひとつない青空であり、空を眺めていると、どこからともなく教会の鐘の音が聞こえてきた。そういえば、ホテルの近くにいくつかの大きな教会があったなと思い出し、そのうちのどこからか聞こえてくる鐘の音なのだろうと想像した。日記を書いたり作曲したりする時間はなかったが、昨夜の段階でもう荷造りをほとんど終えていたため、朝はホテルで比較的ゆっくりと過ごすことができた。午前11時半が満潮のピークになるという高潮予報があったため、できるだけ早くホテルを出発することにした。

当初の予定よりも30分ほど早く、午前8時にホテルを出発した。ホテルを出発すると、後方から輝く朝日が背中に差ってきて、私は思わず朝日の方を振り返った。そして、5日間過ごしたヴェネチアの街での思い出がにわかに湧き上がってきた。わずか5日しか滞在していないのだが、1ヶ月ぐらい滞在していたような気分である。それほどまでに今回の旅も充実したものだ。充実の意味が今回は特殊なのは確かである。まさかあのような記録的な浸水被害に直面するとは全く思っておらず、その体験もまた大きな意味を持っており、自然そのものに対して、そして自然と人間の共存について考えさせられるきっかけとなった。

今いるラウンジはとても広々としたスペースがあり、最近リノベーションをしたらしく、とてもお洒落なデザインとなっている。くつろぐスペースはその人のニーズの数だけ様々なものがあり、私は個室のようなスペースでこの日記を書いている。そして、今からボーディングの時間まで作曲実践をしたいと思う。

このラウンジは、アムステルダムのAspireラウンジよりも食事面で充実している。より厳密に述べれば、Aspireラウンジはサラダやスープがある点で今のラウンジよりも優れているが、こちらのラウンジはさすがイタリアのラウンジと言わんばかりに、クロワッサンやマフィンなどを含め、パン菓子類が非常に充実している。また、Aspireラウンジではコーヒーはセルフサービスで入れる必要があるのだが、このラウンジではコーヒーを入れてくれる人がいて、先ほど私はエスプレッソを注文した。今朝はまだ何も果物を摂っていなかったため、ラウンジ内にあるリンゴとキウイの詰め合わせを先ほど食べた。今からもう一杯ほどエスプレッソをもらって、それを片手に作曲実践をしよう。

ヴェネチア出発の朝はどこか輝きに満ちており、今日という日がまた一つの固有の光を放っているように思える。Marco Polo Clubラウンジ@マルコ・ポーロ空港:2019/11/14(木)09:36

5191.【ヴェネチア旅行記】オランダへの帰還:今夜からの断食について

つい先ほどアムステルダムのスキポール空港に到着した。予定よりも早く空港に到着し、余裕を持って列車に乗り換えることができた。今私は、フローニンゲンに向かう列車の中にいる。いつも旅から戻ってきてこの列車に乗るときに感じるのは、「帰郷の安堵感」である。この感覚を味わい重ねれば重ねるほど、この国が自分にとって大切な故郷になっていく。

今から約2時間ほど列車に揺られればフローニンゲンに到着する。幸いにも今日のオランダは雨が降っておらず、フローニンゲン駅から自宅までゆっくりと歩いて帰ることができそうだ。本日にて短くも長く感じられたヴェネチア旅行を終える。今日は自宅でゆっくりと入浴し、早めに就寝しよう。明日からはまた、これまでの日常と変わらずに、日々を充実感を持って粛々淡々と過ごしていく。

今回の旅を通じて、私はまだイタリアの一つの街しか訪れていないが、イタリアという国に対してはとても好意的な印象を持った。また機会を見つけて、イタリアのその他の地域にも足を運んでみたい。

今回の旅を通じて、改めて私たちが気がつかないうちに身につけている「文化のシニフィエ」を意識することになった。「文化のシニフィエ」というのは、フィリピンのマニラ出身の現代アーティスト、ロナルド・ヴェンチュエラの作品に内包されるコンセプトであり、彼の作品をサン・マルコ広場のギャラリーで鑑賞した際に、私は旅を通じて様々な国の文化のシニフィエに意識の光を当て、自らが纏ってい

る文化のシニフィエを客体化するというを行っているのだと思った。そして、単にそうしたものを客体化するだけではなく、それを再度新たな意味づけを持って自らに所有し直すという編成作業を行っているように思えてくる。旅が持つ意義や価値の一つにはそうしたものと改めて思わされた。

ヴェネチア滞在中の日記で書き留めていたように、今夜から断食を始める。ちょうど旅を通じて冷蔵庫が空になっているので、今夜から断食を始めるのはちょうど良いタイミングだろう。現代において水だけを飲む断食はあまり推奨されておらず、私もそうした断食は行わないようにしている。固形物の摂取を断ち、胃腸を休める形で身体の諸々の機能の修復改善を図っていくが、栄養はきちんと飲み物から摂っていく。

人間にとって水分は非常に大事だが、それと合わせて塩分も重要であり、水断食では塩分の摂取が難しい。今夜からの断食では、早朝にいつものように小麦若葉や大麦若葉のパウダーを水に溶かしたドリンクを飲んだり、カカオドリンク、ルイボスティー、豆乳などを適宜摂取していく。それに合わせて、具なしの味噌汁を飲むことも行う。こうした形で身体機能の維持に必要な最低限の栄養を摂りながら、胃腸を休め、諸々の身体機能を蘇らせていく。今回もあまり無理をせず、3日から5日ぐらの断食に留めようと思う。今夜からの断食は、旅を終えての楽しみの一つである。フローニンゲンに戻る列車の中:2019/11/14(木) 15:22

5192. フローニンゲンに戻ってきて

静けさと落ち着き。その二つがフローニンゲンの自宅に戻ってきた瞬間に受け取ったものである。先ほどフローニンゲンの自宅に戻ってきた。幾分大袈裟かもしれないが、命辛々ヴェネチアからオランダへ戻ってきたと言ってもいいかもしれない。

ヴェネチアの歴史的な洪水を経験したことは、自分の死生観に少なからず影響を与えた。単刀直入にそのようなことを思う。あの洪水が自分の死生観に影響を与え、霊性の捉え方にも何か変化をもたらしたように思う。全く脈絡もないかもしれないが、あの洪水に見舞われたことに何かしらの意味がやはりあり、今夜から断食に入ったこともまたつながっているように思える。

ヴェネチアのマルコ・ポーロ空港を出発したフライトはちょうど正午あたりのものであり、その前にラウンジで軽く昼食を摂った。それが最後の食事となり、今夜から心身が欲する期間だけ断食をしようと思う。不思議なことに、とても自然に断食が始まった感覚がするのである。今夜からしばらく断食を行い、その過程で起こる種々の変化についてまた書き留めておこうと思う。

先ほどメールを確認したら、両親から別々に連絡があった。どうやら私のブログとニュースを見たらしく、ヴェネチアでの災害を心配してのものだった。二人には早めに返信をしておこうと思う。日本でも今回のヴェネチアの件についてはテレビのニュースで放送されているらしい。

フローニンゲン駅に午後の5時過ぎに到着した時、辺りはもう暗かった。そして何より寒かった。もうすっかりと冬の様相を呈しているフローニンゲン。そんなこの街で、私は今夜からまたこれまでと変わらない生活を送っていく。長く長く、この生活を送っていく。淡々と、そして粛々と、自分のなすべき取り組みに従事していく。

黙想的な意識が自己を包み込んでいる。書斎の窓から広がる深い闇の姿がとても懐かしく思える。この深い闇が恋しかった自己。この静寂さと落ち着きを待ち望んでいた自己。

今後はもっと闇が深く、もっと静寂で、もっと落ち着きのある自然の中で生活を営んでいくかもしれない。それは本当は強い希望である。自分の魂がそれを熱望している。魂の遍歴はもう少ししたら終焉なのではないかと思う。自然に到着したら、そこで自分の魂は深く根を張っていくのではないかと思われる。やはり北欧なのだろうか。山と海が近くにあり、森林の中の家に憧れる。人工的な音や明かりから離れ、自然の音、そして光と闇に包まれて暮らしたい。そのようなことをぼんやりと考えている自分が静けさの中に浮かんでいる。

これからすぐに両親に無事だということを伝えるメールをしておこう。フローニンゲン:2019/11/14
(木)18:57

5193. 同別古新・独独独

またしても異常な自己が現れてきた。それは自己が異常なのではなく、自己の異常な側面と言ったらいだろうか。あるいは、それこそが人間性の中に根差す正常さなのだろうか。とにかくもう日々を

新たな気持ちで生きたいという思い。日々が創造に次ぐ創造に水没してしまうかのような毎日をごしたい。

人生における一日などなくてよく、ただそこに創造だけがあってほしいという思い。人生があって創造があるのではなく、創造があって人生があるという関係性の転換。その転換からの再出発。再出発からの己の真なる人生。そうした人生がまた産声を上げた。

時々私は、自分がどうかしてしまったのではないかと思うことがあるが、そう思う自分はまだ何もわかっていない。どうかしてしまった自分が正しく、どうかしてしまったと思う自分は正しくない。正しい正しくないを超えた後に待つ正しさがあることを見極めなければならない。上述のそれは、そうした二元論的なものを超えた先にある正しさについて述べていることは言うまでもない。

自己即闇、自己即光、闇即光、光即闇。窓の外には光輝く闇が広がっていて、深く暗い光が広がっている。

自分の中の何かを開いてくれたヴェネチア。特に、あの悲惨な歴史的災害。

自分の内側の霊的な感覚がまたこれまでの位相とは異なる所に開かれていく。ヴェネチアに滞在中、「ああ、またやってきた」と思った。

日常生活を普通に送ることが少し難しいくらいにある知性が低下し、その水位が下がったおかげで切り開かれる別の知性、ないしは感覚。ヴェネチアの街を歩いている最中に、自分の知性のある領域が愚鈍なものとなり、また別の領域が突如として開く感覚があった。それはどこか異常な知覚を伴うものであった。そうして切り開かれた感覚は、世界を捉える眼を変えた。その眼はこれまで何度も言及している心眼ないしは魂眼の類だが、それはこれまでとはまた別の次元で開眼しつつあるのを感じる。今夜から始まった断食は、そうした眼をさらに押し開くだろう。それらの眼に真剣を差し込む形で切り開くに違いない。

今自分が生きてこうして呼吸していること、言葉を紡ぎ出していることが不思議である。それは浮遊感を伴った不思議さである。

元々独りである私は、またこの世界の中で独りになった。独りにも位相があるのだ。今度の一人は、また異なる位相に姿を現した独りである。そんな独りの自分に対して、「いつまで独りでいるのだ」と問う自分がいた。だが、そうした自分もまた結局独りなのだと思う。そうではないだろうか？ きっとそうだろう。

日記を書くこと、作曲すること、旅をすることしかなくなった。それだけしか自分に残されたことはないかのような諦念が湧き上がる。それらしかないが、それだけがある。この「ある」というのは、存在及び人生の隅々にまで満たされたものであり、もう何の空白も余白もない。

ヴェネチアの街が水で満たされたあの姿。水はどこまでも入り込む。それは水の脅威であり、水の持つ神聖な力だった。あの脅威的かつ神的な水のように、日々の生活の隅々が言葉と音に満たされ切った人生。そんな人生がまた明日から、いや今この瞬間からまた始まったように思う。

ある感覚・感性が途切れた。それに伴って世界観や死生観も途切れた。そして新たな感覚・感性が生まれ、世界観と死生観もまた新たなものになった。

明日からの日々は、また連続的に捉えられるかもしれないが、どこか妙に非連続的な形で捉えられるような気もしている。自己の外壁、あるいは外殻が剥がれ落ち、中から新たな自己がひょっこり顔を出した。その顔は自分の顔をしているが、やはり新たな顔だった。フローニンゲン:2019/11/14
(木)20:22

5194. 守護神：日常と非日常の間の通路

ヴェネチアに滞在していた時のホテルの自室に、胴でできた象の置き物があった。それが寝室のドアの地面に置かれていて、私はホテルに到着した日に、なぜかその象の頭を撫でた。よくわからないが、私がああ歴史的な洪水から逃れることができたのは、この象の頭を撫でたことと関係しているように思われた。そしてもう一つ、小松美羽さんが創造した神獣や狛犬の作品を見て、それらに対して感謝の念のようなものを持ったことも関係しているように思えた。あの象の置物を誰が作ったのかわからないが、象の置物と小松さんの作品によって命を救ってもらえたような不思議な感覚があった。それらは自分にとっての守護神的な存在だったのかもしれない。

そもそも元を辿れば、あるいは少し視点を変えて考えてみると、自分の命をかけてその象の置物や小松さんの作品に会いに来たとも言えるかもしれない。本当に自分でもよく分からないが、なぜ自分はこの数日間ヴェネチアにいたのだろうかと思わされる。何かの導きがそこにはあって、その導きの中に自分の人生が包み込まれているような感覚があった。そして今もそうした感覚が続いている。

今朝方、ホテルを出発する時、最後にもう一度象の置物の頭を撫でた。鼻も撫でた。実家にいる愛犬を撫でるようにしてそれを撫でた。その象の置物にも命があるように思えた。命を吹き込んだのは誰だったのだろうか。おそらく、その象の作り手と私の二人だろうか。創造者と鑑賞者の二人、あるいは第三者として人知を超えた存在が、その象に命を吹き込んだのだ。命というのはそういう風に生まれるのかもしれない。

明日にはまた協働プロジェクトに関する打ち合わせの仕事がある。それは日常を形作る大切な仕事であると同時に、それすらも非日常的なもののように思えてくる。日常と非日常が逆転し、それらの間に相互連関の通路ができた。その通路は完全なまでに大きく開かれており、その通路をもはや通ることを意識しなくてもいいほどである。

明日からの日々は、そうした通路を行ったり来たりする形で進んでいくのだろうか。それを続けていると、その通路の轍は消え、日常も非日常もなくなる。その瞬間に、より一段と高い形而上学的な日々が顔を現しそうなのだ。このあたりについては、言葉を尽くして説明する限界があるように思えてくる。であれば、それらは全て音を通じて表現しよう。明日からもまた、作曲理論の学習と作曲実践に精進する。人知れず学び、人知れず実践を行う。そして、人知れず毎日を生きていく。フローニンゲン:2019/11/14(木)20:50

5195. フローニンゲンに戻って最初の朝の感覚と夢

どこか再度この世に生を受けたかのような不思議な感覚に包まれる早朝。ヴェネチアからフローニンゲンに戻ってきた最初の朝は、午前3時半に起床した。昨夜から断食を始め、胃腸が消化吸收のために働かなくて済んだこともこうした時間の起床につながっているかもしれない。

ヴェネチアで体験した生命の危機に関するあの出来事があってから、3日ほど経った。あの出来事がまだ3日前のことであることがにわかに信じられない。もう遙か昔のことに思えてしまう。どこかそれは自分の人生の中で起こったこととは思えず、前世や前々世あたりに起こった出来事なのではないかと思えてしまう。確かに、あの出来事は1200年のヴェネチアの歴史の中で6度目の大洪水とのことであり、1200年の期間の中に、自分の生まれ変わりがいてもおかしいことは全くない。そのようなことを思う。

どのような中でそうしたことを思っているのか？それはこの深き闇と静寂さの中においてである。今の気温は3度とのことだが、明日の最低気温はマイナス1度となる。フローニンゲンに帰ってきてみたら、もうそこには冬の世界が広がっていた。

外の世界は流転している。それと同じく自分の内側の世界も流転しているのだろうか。おそらくそれはあるべき姿で流転している。そう実感する。

無音という音が充満した静かな世界。この時間帯の書齋は、そうした世界の中にすっぽりと収まっている。

旅の体験を消化し、咀嚼するための静けさがここにある。さらには、人間として深く生きるために必要な静寂さと落ち着きがここにある。そしてそれは外側の世界だけではなく、自分の内側の世界にもある。

一つの旅が終わりを告げた時、それはまた新たな旅の始まりを告げる。ないしは、それを予感させる。

毎日質素な生活を送りながら、1ヶ月に1度のペースで世界のどこかに旅に出かけている自分。2019年最後の月になる来月はどこに旅に出かけていくのか。年末年始はマルタ共和国かフィンランドでやはり過ごそうか。ギリシャに行くのはいつがいいのだろうか。トルコもとても気になる国だ。トルコの情勢は大丈夫だろうか。友人のラーナがいるグルジアにも足を運んでみたい。せっかく彼女があれだけグルジアの自然の素晴らしさを伝える写真をメールで送ってきてくれたのだから。

年明け後、2月か3月には予定通りベルギーに行こう。その際にはブリュッセル、アントワープ、ブリュージュの3つの都市に滞在しよう。中国人の友人のシェンから話を聞いたバルト三国に訪れるのはいつにしようか。そうしたことに思いを巡らせる自分がある。ただし今は、ヴェネチアで過ごしたあの濃密な時間をゆっくりと咀嚼していこう。

自己にとっての最良の肥やしとなる旅の体験を、経験にまで昇華させていこう。消化がなければ昇華はあり得ず、その消化を行うためには、こうした静けさと落ち着きで満ちた環境が必要になる。

ヴェネチアから戻ってきた今朝方に見た夢は、非常に断片的なものだった。現在協働をしているクライアント先から、8月分の請求書を再度送ってほしいというものだった。8月分の請求書は随分と前にすでに送っており、しかも費用の払い込みも終わっている。一応私はそれを伝えたのだが、それでも再度請求書を送ってほしいということだった。それでは余計に支払いが行われることになり、再度お金が入ってくることは別に悪いことではないのだが、それはやはりおかしいことではないかと思った。念のため、もう支払いが完了していることを再度相手方に伝えたところで夢が終わった。そして私は、夢を見ない深い意識状態に入ってしまった。それが今朝方の夢だった。

今日から再びフローニンゲンでの生活を送るに際して、とにかくゆっくりと日々を過ごしていこうと思う。そうした日々の中で着々と自分の取り組みを進めていく。それこそが質素堅実な生活であり、充実感に満ち溢れた生活なのだと思う。フローニンゲン:2019/11/15(金)04:33

5196. 言葉と音の庭園:永遠を希求する何か

昨日、ヴェネチアからフローニンゲンに戻ってきている最中に、言葉の塔と音の塔を作っていこうということを考えていた。それはもちろん自分の内側にである。しかしそれは、自分の内側に作られるものでありながらも、外側の世界に放射・投影されるものでもある。「塔」という言葉を用いながらしばらく考えていると、それよりも「庭」のようなものを作りたいという思いが内側から湧いてきた。

言葉の庭園や音の庭園を作ろうとする意思。それは自分の意思や魂の要求事項のように思えてきた。自己や他者がくつろげるような庭園を作りたい。自分の意思や魂は、そのようなことを希求しているのではないかと思えた。そうした庭園の材料は己の言葉と音である。自分の内側から生まれてくる言葉と音を持ってして、そのような庭園を作っていく。

自分の内側から言葉と音を生み出していくためには、逆説的ではあるが、言葉と音を生み出し続けていくことが大切であり、同時に自己を深め続けていくことが重要になる。

以前にも言及したが、私自身は旅をすることをそれほど好んでいない、言い換えると旅に出かけていくのが億劫なことが多いのだが、自分の魂がそれを熱望しているような状態にある。だからこそ、私はそれに導きかれる形で、毎月世界のどこかに旅に出かけている。旅に出かけると結果として私は、旅に出かけて良かったといつも思うから不思議である。そうしたことから、旅という遍歴を好む自らの魂には感謝をする必要があるだろう。魂のそうした特性のおかげで、一つ一つの旅を通じて、私は自分の現在の殻からまた一つ外側に抜け出していく。

昨日、スキポール空港に到着した時、この人生においてあと何回旅に出かけて行くことができるのかを考えている自分がいた。それは実はもう数えるほどなのではないかと思う。仮に毎月旅に出かけて行ったとしても、それはもう数えることができちゃうのだ。このように、自分の人生の中には、無限に思えていて実は有限な事柄がたくさんある。旅に出かけていくこともそうであるし、両親の顔を見る回数もそうだ。その他にもたくさんある。書ける日記の数や作れる曲の数もそうである。

やはりこの生は有限であり、有限なもので満ち溢れている。そうした中で、そしてそれを知った上で無限、ないしは永遠を求めようとするのは人間の性なのだろうか。永遠を希求する気持ち、これはもしかしたら無限なものなのかもしれない。永遠を希求する気持ちが永遠に存在している。それはどこかにあって、そのどこかは永遠の園のように思える。そうなると、やはり永遠なるものはどこかにあるのではないかと思えてしまう。

昨夜就寝前に、自己が恍惚的な感覚の中に溶け出していく、世界と一体化するという体験があった。それはベッドの上で横たわっている時に起こった。それを説明することは如何様にもできるが、そうした説明は野暮だろう。そうした直接体験があったことだけをここに記録しておけばいい。

完全なる闇の世界が目の前に広がっている。実はそこには街路樹があり、赤レンガの家々がある。

影の世界の中に絶えず存在しているもの。それらを見逃すことなく、それらの存在に気づきの光を当てよう。フローニンゲン:2019/11/15(金)04:49

5197. 断食と続編のオンラインゼミナールに向けて

昨夜から断食を始め、今日からしばらくは固形物を摂取しない。だが、いつもと同じように、栄養豊富な飲み物については摂取していく。そして、身体の機能の維持に必要な塩分は有機味噌によって摂取していく。

今回数日間の断食を行うに際して、以前1週間ほどの断食をする前に読んでいた4冊の参考文献を改めて読み返したいと思う。それらは以前にも言及していたように、“Prof. Arnold Ehret’s Mucusless Diet Healing System: Annotated, Revised, and Edited by Prof. Spira (2014),” “Prof. Arnold Ehret’s Rational Fasting for Physical, Mental and Spiritual Rejuvenation: Introduced and Edited by Prof. Spira (2014),” “The Science and Fine Art of Fasting (2013),” “The Transformational Power of Fasting: The Way to Spiritual, Physical, and Emotional Rejuvenation (2012)”の4冊だ。断食の進め方についてはもちろんのことながら、断食が心身や霊性にもたらす効果とそのメカニズムについて、改めて理解を深めていこうと思う。

今日は午前中に1件ほどオンラインミーティングがある。ミーティング以外の時間は、基本的に日記を執筆することや作曲実践を行うこと、そして読書に時間を充てていきたいと思うが、午後にでも、3ヶ月前に終えたオンラインゼミナールの続編に関する案内パンフレットを作ろうと思う。

前回ゼミナールに参加して下さったある受講者の方が続編を提案してくださり、今回は前回の半分ほどの回数で、短期集中的なゼミナールにしたいと思う。合計で4回ほどのゼミナールを12月に2回、1月に2回行う形にしたい。2019年と2020年をまたぐ形で、今年の振り返りの意味と、新年を新たな気持ちで開始させる二つの意味を持たせたゼミナールにしたいと思う。続編のゼミナールに関する構成を練り、案内用の文章や音声ファイルをまた作っていこうと思う。それらの大枠は今日から今週末にかけて作っていきたい。

今回のゼミナールは前回の続編という形を取るが、新しく参加して下さる方にも開かれたゼミナールにしたい。既存の実践を深めるきっかけになるようなゼミナール、そして新たな実践を始めるきっかけになるようなゼミナールが実現されればと思う。それに加えて、前回と同様に、多様なバックグラウンドを持つ方々が参加して下さればと思う。ゼミナールでの対話や交流がもとなり、何かの

きっかけに繋がるような場が生まれればと思う。そうした場作りに向けて、今日から数日間、色々と構想を練ってみよう。期待することは、そうした構想を超えた形の場が生まれることである。今回もまたきっと、そうした場が生まれるのではないかという予感がある。フローニンゲン:2019/11/15(金)
05:19

5198. ヴェネチア旅行から帰ってきての初日及び断食1日目を終えるに際して

時刻は午後7時を迎えようとしている。今日は朝から晩まで薄暗く、午後4時半を迎える頃にはもう辺りは随分と暗くなっていた。明日の最低気温はマイナス2度とのことであるから、随分と冷え込むことになるだろう。

断食1日目は、何も問題なく終わりに近づいている。昨夜からしばらくの間断食をする予定であり、そのプロセスについて書き留めておきたい。ヴェネチアでついついピザを1度ほど食べてしまうことがあったため、普段の食生活と完全にはなかったが、全く問題なく断食1日目を終えることができそうだ。

今日は、腹が鳴ることはあったが、空腹感に苛まれることは一切なかった。今日はまだ断食1日目であるからあまり無理をせず、少々空腹感を感じた際には味噌を舐めることをしていた。無理に断食を進めることは決してないが、無理をして断食を終える必要も全くない。今回は、心身が欲するまで断食を進めていく予定だ。

前回は7日経っても何も問題がなかったのだが、何か頭の判断で断食を止めてしまった。今回はそうした形で断食を終えない。思考ではなく、内的必然性を持ってして断食を終えるようにする。それが10日後なのか2週間後なのかわからないが、そうした必然性がやってきた時に断食を終える。

これまでは八丁味噌(豆味噌)、玄米味噌、麦味噌の三種類を常備していたが、今後は麦味噌を中心にしてもいいかもしれないと本日思った。改めて手持ちの味噌の種類について調べてみたところ、今の自分の食生活を踏まえると、豆味噌や米味噌よりも、タンパク質を構成するアミノ酸、カリウムやカルシウムなどのミネラルが豊富な麦味噌を摂取した方が良さそうだと判断した。

今日は、ヴェネチア旅行から戻ってきた初日であったが、旅に出かけていく前ともう全く同じ生活リズムになっている。今朝の起床は確か午前3時半であり、そこから今のところ10曲ほど曲を作り、日記を少々執筆していった。それに並行して読書も行い、今朝方に書き留めていた4冊の書籍のうち、2冊の再読を終えた。前回それらの書籍を読んだのは7ヶ月以上も前であり、今回の再読を通じて、また新たな発見があった。

断食はやはり実践とこうした継続的な学習が大切となる。書籍の著者も述べていたように、断食というのも一つのアートなのだ。そこには不断の学習と実践が求められる。現在はせつかく1ヶ月に1回ほど旅に出かけているのだから、旅行から帰ってくる都度に断食をしてみようかと思った。旅に出かける前に冷蔵庫を空にするので、それをきっかけとして断食を行うのもいいだろう。

前回7日間の断食を行ったのが7ヶ月近く前のことであるから、このように間隔を空けすぎてしまうのではなく、もう少し定期的に断食を行うのがいいだろう。ただし、1ヶ月に1回の断食の場合は、1日か2日程度の短めの断食にした方が賢明そうだ。それは書籍から得た知識に基づく。明日からは断食2日目が始まり、ここから少しずつ胃腸が消化ではなくヒーリングのほうに働き始めるため、そのプロセスを観察しながら見守ることが楽しみだ。フローニンゲン:2019/11/15(金)19:05

5199. 断食2日目の開始

ヴェネチアから戻ってきての2日目、そして断食の2日目が静かに始まった。一昨日にフローニンゲンに戻ってきた夜から断食を始めているので、もう1日半以上何も固形物を口にしていない。今回の断食も順調に進んでおり、お腹はまだ鳴るものの、空腹感に苛まれることは一切なく断食が進んでいる。今後はお腹が鳴ることもほぼなくなっていく、断食がより楽になるだろう。今も苦しさは一切ない。それはこれまで地道に探究と実践を続けてきた、自分に合った食生活の実践のおかげかと思う。日々の食実践は、こうした断食のための準備だったのである。

昨日の夜もすでに胃は空っぽの状態であり、とりわけ解毒を司る肝臓が身体の機能回復に働き始めたように感じる。まずは身体次元でのヒーリングが始まっており、それは感情的側面でのヒーリング、さらには霊性的側面でのヒーリングへと進行していこう。

手元にあるカレンダーを用いて断食の日数を管理しており、昨日、とりあえずの目安として12/1まで断食の日数を計算していた。仮に12/1まで断食を行うのであれば17日間ほどのものとなる。

断食は初日や2日目が一番きついというのは一般的だが、これまで何回か断食をしてきた経験上、私の場合はそうした辛さはほとんどなかった。今回も辛さを感じられず、この感覚を続けていけば、断食の状態が逆に快楽に変わる瞬間というのがあり、何も食べなくても全くもって問題ない心身状態が来るのを知っている。そうした状態に入り、そうした状態が自然と終わろうとしている時に断食を止めようと思う。逆に言えば、そうした状態が続いている限りは断食を止めない。直感的にそれは2週間ぐらい続きそうだと思ったので、とりあえず12/1をめどに断食日数を数えてみたのが昨日の出来事だった。

昨日言及した断食に関する4冊の書籍のうち、2冊を昨日の段階で再読した。それらの書籍に共通して、断食の日数をあらかじめ決めておく必要はなく、その時の状態に応じて然るべき対応をしながら断食を終えていくのが良いと書かれていた。まさにその通りかと思う。断食を無理に進めていくのは危険であり、断食の状態が自然と終わろうとしているタイミングを見計らって、きちんとした手順と方法で断食を終えていくのが大切だと私も思う。

前回は5日間断食をしようと思って始めたのだが、その時も自分の状態を見ながら柔軟に断食日数を伸ばすことにした。だが、終わりに関しては7日間というのが切りが良いと思ったのでそこで止めてしまったように思う。今回はそうした形で断食を止めることはない。必要な治癒が完全になされるまで断食を進めていく。次の変容に向けた治癒が完遂されるまで断食を実行していく予定である。

断食をしながら改めて昨日思ったのは、やはり固形物を食べないので、1日の活動時間が増えるということである。また、固形物を無駄に食べないことによって、胃腸の消化活動にエネルギーが使われることなく、自分の取り組みにエネルギーを充てることができることを再認識した。

断食が終わった後の食生活についても一度見直そうと思っている。果たして昼に4種類の麦のフレークを食べる必要があるのか、夜に芋類を食べる必要があるのかが見直しのポイントとなる。それらは全て栄養的な面では優れたものを持っているが、それらを摂取することが栄養過多になってい

ないかどうかを調査し、固形物を無駄に食べない食生活を断食後は心がけていく。フローニンゲン:2019/11/16(土)06:23

5200. 断食2日目の夢

断食2日目の朝はとても清々しい気持ちで始まった。とりわけ身体次元での治癒が進行しているのを実感する。すでに胃腸は消化にエネルギーを使うのではなく、身体機能の回復に動き始めているようだ。そうしたこともあってか、睡眠時間は旅から戻ってきた一昨日のものよりも多く、昨日から今日にかけては十分な睡眠時間を取っていた。

就寝したのは夜の9時半過ぎであり、そこから数分以内に入眠ができた。目覚めてみると、時刻はすでに5時半に近づこうとしていた。今日もまずはいつもの通りに夢を振り返り、その後に早朝の作曲実践に励みたい。

夢の中で私は、元サッカー日本代表で今でも現役で活躍するある選手(KH)と話をしていた。その選手と私は歳が近く、また彼は最近オランダのサッカーチームに移籍したこともあり、ご近所さんであった。その選手と私は、オランダのある街を歩きながら話をしていた。運河沿いのウォーキングロードを歩くことは大変気持ち良く、その日は天気も良かったので、尚更良い気分であった。

その選手との話の中で興味深いと思ったのは、その選手はプロサッカー選手として活動を続けながら、今年の春からは日本を代表する大手の商社に入社することになったそうだ。それは転職という形ではなく、サッカー選手を続けながらとのことであり、主には経営に携わるようなポジションで仕事をしていくらしい。その選手がどうして商社という業界を選んだのかが気になったので、それについて質問しようとしたところ、「その会社の若い奴らと週末にサッカーや遊んだりして交流するのが楽しいんですよ」と彼は述べた。

その商社に入社する新人たちは一様に高学歴だが、サッカーがうまい人たちが多くらしく、それでいて面白い価値観を持っている人も多いとのことだった。その会社に就職した先輩や友人たちが何人もいる私からしてみると、その選手の反応は意外だった。確かにその会社に入社した先輩の中で非常に面白い価値観や発想を持っている方がいたが、それ以外の先輩や友人はみな、さほど奇抜な価値観を持っているようには思えなかった。そもそも、会社に入社しようとする時点で価値観が

いかほどかが見えるような気がしていたのである。とは言え、その選手はその会社で働くことを楽しみにしているようだった。まだ働き始めていないのだが、すでに若手と交流を図っているあたりがその選手らしい。

話しながら運河沿いを歩いていると、近くにその選手の家があるとのことなので、そこで夕食を一緒に食べないかと持ちかけてくれた。私はその提案を有り難く思い、そうさせてもらうことにした。

彼の家が建っているのはなぜか芝生の上であり、その周りは子供たちが遊べるような公園になっていた。あるいは、大きな公園の中に住宅地があると言ってもいいかもしれない。

その選手の家が見えてきた時、「いや～、コンクリートの家はダメですよ。木造じゃないと落ち着かないんです」と彼は述べた。彼曰く、コンクリートと木造では、居住空間に漂う優しさが違うとのことであり、私はそれに大変共感した。私もそのように思う。そうした共感の念を持って家が目の前に現れた時、その選手は「あれっ、なんで窓が開いてるんだ？」と独り言を述べた。先ほどまで晴れだったのだが、家に到着する間際になって天気雨が降り始め、その選手は開いた窓から家の中に雨が入ってくることを心配しているようだった。そこから彼は、「すみません、ちょっと先に家に行って急いで窓を閉めてきます」と述べて、先に家の中に入った。

私は空を一瞥し、虹が出てきそうな天気雨を眺めてから家に入っていった。家に上がらせてもらうと、すぐさま扉の向こうから元気な男の子がやってきた。歳はまだ3歳ぐらいであり、どうやらその選手の子供のようだった。名前は「たろう」というらしい。そしてすぐさままたもう一人男の子が姿を現し、歳と名前を尋ねると、歳は7歳で、名前は「たかゆき」というとのことだった。二人はとても明るく物怖じしない性格であり、確かに彼らはその選手の子供だと思った。

二人の子供に挨拶をした後に、家の奥に向かうと、その選手の奥さんとお兄さんがいたので、二人に挨拶をした。奥さんはちょうど今、夕食を作っている最中だった。

二階の窓を閉めに急いで帰ったその選手が一階に降りてきて、夕食ができるまでみんなで遊ぼうということになった。すると、もう一人男の子が姿を現した。彼はその他の二人と違って、落ち着きを見せており、逆に少しばかり引っ込み思案な印象を私に与えた。とは言え、彼も私に挨拶をしてくれ、歳は11歳とのことであった。名前を教えてもらった瞬間に、それがうまく聞き取れず、再度名前を聞

いて、漢字でどう書くのかを教えてもらった。すると、「見聞見聞」と書いて、「みけ」という名前らしい。私はとても変わった名前だなと思いながら、みけ君と少し会話をした。

みんなで遊ぶ前に、キッチンの方に全員で行き、奥さんが何を作っているのかを見に行った。すると、次男のたかゆき君が、キッチンに置かれていたウナギの蒲焼を盗み食いをはじめ、その一部を私に分けてくれようとしていた。結局たかゆき君が一口食べた段階で盗み食いが奥さんにバレてしまった。特に奥さんは怒るわけでもなく、それは日常茶飯事のここのようだった。どこか家庭的で微笑ましい雰囲気がその場に流れていた。フローニンゲン:2019/11/16(土)06:55